

インターンシップ経験と早期的なキャリア支援科目の実施がもたらすキャリア形成

Career development through internship experience and early implementation of career support courses

体育学部体育学科

常浦 光希

TSUNEURA, Kouki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

青山学院大学コミュニティ人間科学部

田原 陽介

TAHARA, Yosuke

Aoyama Gakuin University

College of Community Studies

要約：体育・スポーツ系大学において、効果的なキャリア教育を実施していくことが求められている。本稿では、早期のキャリア支援や大学生活の取り組みがインターンシップの参加や職業選択といったキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを目的とする。

(1) インターンシップへの参加有無は、職業選択やキャリア適応力にかかわる因子得点と有意差がみられなかった

(2) 大学生活において、学業に注力している層はキャリア形成に対して自信があり、部活動に注力していない層は、就職活動を新たなチャレンジと考えている可能性がある。

これらの結果から、キャリア支援の単純な早期化はキャリア形成には影響を及ぼさないことが理解できた。

キーワード：キャリア教育、キャリア支援、職業選択

I. はじめに

近年、インターンシップへの参加率が非常に高まっており、就職活動そのものの早期化が再び懸念され始めている。大学において、キャリア教育が求められ、入学後の初年次教育からの接続を含め、キャリア教育やキャリア支援の展開について議論されている（花田ら、2011）。大学進学をするうえで学習意欲や目的意識が不明確である学生が増えている（文部科学省、2011）と指摘され、大学でどのようにキャリア意識や職業選択に関わる行動を促すかが課題となっている。こうした大学生の職業意識や職業選択においては、下村（1994、1998）が、職業選択の決定要因について検討している。さらにインターンシップ経験が大学生や新入社員のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかについて検討され始めている（古田、2010、2014）。

大学生の就職活動は、3年次の夏季長期休暇前からインターンシップという形で始まっており、近年は、1・2年生対象のインターンシップも開催されるようになってきている。こうした状況下において、大学にお

けるキャリア支援科目の実践が報告されている（田原ほか、2020）。常浦・田原（2021）は、大学3年次から4年次のキャリア支援科目を通じ、就職活動に意欲的な学生は、職業選択をなじみのある決定として捉えていると述べている。さらに大学生の早期段階から就職活動の具体的なイメージを想起させることが必要だと指摘している。なじみのある決定にはどのように取り組みが求められるのかについて検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、3年次キャリア支援科目受講者を対象に早期のキャリア支援（2年次）および大学生活の注力活動がインターンシップの参加や職業選択といったキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

2-1 対象

本稿における調査対象は、まず2021年4月から7月において体育学科3年生を対象としたキャリア支援科目の履修者99名を対象とした。調査期間は、2021年7

月に実施し、9月に追加調査として、インターンシップの参加状況についてGoogleフォームを用いて、直接、その場で回答を得た。

2-2 項目

質問紙調査における項目として、現在の大学生活において注力している活動として、学業、部活動、サークル、アルバイトについてそれぞれ4件法で回答を得た。

本稿では、「キャリア適応力尺度」「職業選択課題の認知尺度」「職業志向測度」を活用し、質問項目を設定した。1つ目のキャリア適応力尺度は、吉田(2010)が作成した13項目を設定した。キャリア適応力尺度は、「キャリア自信」「キャリア好奇心」「キャリア自己決定意識」「キャリア他者調整意識」の4因子で構成されている。2つ目は、下村(1998)を参照し、「職業選択課題の認知尺度」20項目を設定した。「曖昧性」「複雑性」「重要性」「時間的・金銭的制約」の4因子から構成されている。3つ目は、若林ほか(1983)が作成した「職業志向測度」から26項目を設定し、「職務挑戦」「人間関係」「労働条件」の3因子から構成されている。いずれも「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」までの5件法で回答を得た。データ分析は、IBM SPSS Statistics 26を用いた。

2-3 下位尺度

本稿で用いた下位尺度ごとに内的一貫性の分析を行った結果を表1に示している。本稿上では、いずれの下位尺度においてもクロンバックの α 係数が0.60以上を示したことから、本調査票の内的一貫性はある程度、担保されていると考える。「職業選択課題の認知」

における複雑性因子において、0.60未満であったことから、「職業の決定はどれほど面倒なものではないと思う」の項目を削除し因子得点として換算した。

Ⅲ. 結果と考察

3-1 インターンシップ経験と大学生活における注力活動の実態

表2に示すようにインターンシップに関する項目の度数分布を示す。3年次夏季インターンシップの経験者は全体の34人(34%)であった。そのうち、「選考のあるインターンシップ」への参加者は12人、「選考のあるインターンシップへ応募したが参加できなかった」が7名、「選考のあるインターンシップは参加していない」が15名であった。本稿における調査対象者のうち、2年次からのキャリア支援科目を受講している学生は63名(63%)であったことから、早期的なキャリア支援の実施が必ずしもインターンシップへの参加を促すわけではない可能性が考えられる。

続いて表3に示すように、大学生活において注力している活動の実態として、学業等は、「注力している」が86名(86%)、「注力していない」が13名(13%)であった。部活動は、「注力している」が72名(72%)、「注力していない」が27名(27%)、アルバイトは「注力している」が67名(67%)、「注力していない」が32名(32%)、サークルは、「注力している」が22名(22%)、「注力していない」が77名(77%)であった。この結果からも、基本的に課内活動である学業等には注力していると考えている。主に部活動への所属者が多いことが考えられるため、サークルに注力していない回答が多いと考えられる。

表1 下位尺度の信頼性

尺度名	下位尺度	項目数	α
キャリア 適応力尺 度	キャリア自信	7	.848
	キャリア好奇心	2	.683
	キャリア自己決定意識	2	.682
	キャリア他者調整意識	2	.703
職業選択 課題の認 知尺度	曖昧性	5	.772
	複雑性	4	.606
	重要性	5	.783
	時間的・金銭的制約	5	.882
職業志向 測度	職務挑戦	14	.924
	人間関係	5	.901
	労働条件	7	.859

3-2 2年次キャリア支援科目とインターンシップ参加経験との関係

2年次キャリア支援科目への参加者と未参加者の「キャリア適応力尺度」「職業選択課題の認知尺度」「職業志向測度」因子得点をt検定で比較した結果、いずれの因子得点においても有意差がみられなかった。キャリア適応力については、自分らしいキャリアを歩んでいくことといったキャリアに対する自信や新たな仕事に就くチャンスといったキャリアに対する好奇心といった因子であり、早期的なキャリア支援での影響は大きくない可能性が考えられる。一方で職業選択課題の認知は、職業の決定に対する自信の意識を問う項目であり、職業選択上の課題を把握するものである。職業志向測度においても同様の尺度であることから、2年次のキャリア支援プログラムそのものが影響を及ぼしている可能性が考えられる。この結果は、単純なキャリア支援の早期的な実施だけでは、職業選択や職業志向の具体化が難しく、結局は実際に就職活動が本格化していかなければ、行動を生起しにくいことが考えられる。常浦・田原（2021）が職業選択はなじみのある決定と述べていることから、就職活動を学生自身において具体化させていくためには、キャリア教育の観点から縦断的に調査していくことが求められる。

次にインターンシップ参加経験有無についてt検定による比較結果においても、それぞれの因子得点とでは有意差がみられなかった。インターンシップ参加経験者が30%の状況であったことを鑑みて、2年次の早期的なキャリア支援だけでは、インターンシップの参加を促しにくい可能性が考えられる。インターンシップへ参加が推進されるようになった近年、インターンシップへの参加を促すために職業選択や職業志向を明確化していくプログラムではなく、別のアプローチが求められるだろう。このことから単純に就職活動に求められるキャリア支援を早期化することが就職活動等に関わる志向・意識に影響を及ぼすとは限らないことがいえる。

3-3 大学生活における注力活動との関係

学業等について注力している群と注力していない群の2郡と各因子得点をt検定による比較を行った結果、「キャリア自信」と「曖昧性」因子得点に有意差がみられた（表4）。キャリア自信の因子では、注力している群が注力していない群と比べ、有意に高い結果であった。キャリア自信の因子は、自律的にキャリアを形成することに対する自己効力感を問う項目が多いことから、学業等に注力している群は、自身のキャリア形成に関しても自信をもって取り組むことが

表2 インターンシップおよび2年次キャリア支援科目の参加実態

		N	%
2年次キャリア有無	受講	63	63.6
	未受講	36	36.4
インターンシップ参加有無	参加した	34	34.3
	参加していない	33	33.3
選考のあるインターンシップ参加有無	選考のあるインターンシップへ参加した	12	12.1
	選考のあるインターンシップへ応募したが参加できなかった	7	7.1
	選考のあるインターンシップは参加していない	15	15.2
	参加していない	33	33.3

表3 大学生活において注力している活動実態

		N	%
学業授業ゼミ等	注力していない	13	13.1
	注力している	86	86.9
部活動	注力していない	27	27.3
	注力している	72	72.7
アルバイト	注力していない	32	32.3
	注力している	67	67.7
サークル	注力していない	77	77.8
	注力している	22	22.2

できると考えられる。職業選択課題の認知における「曖昧性」得点因子は、注力していない群が注力している群に比べ、有意に高い結果であった。キャリア自信と同様に、ある程度、学業等に注力していると認識している層は、職業選択において自身の目標や選択する基準について考えることができていることが想定される。職業選択への迷いやキャリアを形成するうえでの自信をもつ、きっかけを与えるためにも、まずは大学生活において、学業等に注力する基盤を形成することはキャリア支援において欠かせないと考える。効果的なキャリア支援を展開するためにも、今後、大学入学時期に展開される初年次教育とキャリア教育やキャリア支援との接続について検証していくことが求められるだろう。

次に部活動に注力している群と注力していない群での因子得点の t 検定による比較結果では、「キャリア好奇心」因子得点に有意差がみられた。学業等とは異なり、部活動に注力していると考えている群は、キャリア形成に関わる要因との関係性がみられなかった。唯一、関係がみられたキャリア好奇心の因子では、注力していない群が注力している群に比べ、有意に高い結果となった。本稿における調査対象者は体育・スポーツ系大学のうち、キャリア支援科目の履修者を対象としていることから、多くが部活動に所属している。そのような中、所属していない、もしくは所属しているが部活動に注力できていないと考える層は、新たなチャレンジをしたいという考えをもち、部活動にではない、別の活動にチャレンジをしたいと考えているのではないだろうか。就職支援を行う上で、様々な活動のバランス良く取り組むことも必要ではあるが、3年次の学生に対して、大学生活での新たなチャレンジの1つとして就職活動を提示することも、キャリア支援上、必要なアプローチになる可能性が考えられる。

アルバイトおよびサークル活動の注力状況において

は、本稿における調査対象者では、有意差がみられなかった。さらに職業志向に関しても有意差がみられなかったことから、大学生活における学業や部活動等の活動は、キャリア形成や職業選択に影響を及ぼす要因として考えられるが、職業に対する志向については、異なる影響要因もしくは媒介要因があることが考えられる。

IV. まとめ

本稿では、早期のキャリア支援や大学生活の取り組みがインターンシップの参加や職業選択といったキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかについて検討した。本稿における調査対象者は、インターンシップへの参加有無と2年次キャリア支援の参加有無による職業選択やキャリア適応力、職業志向といった要因との関係がみられなかった。大学におけるキャリア科目において、単純にキャリア支援プログラムを早期化することが適切なアプローチではない可能性が考えられる。実際、今回の調査対象者は、2年次キャリア支援科目を履修している学生が6割いる中、その後の3年次夏季インターンシップへの参加状況は高くない結果であった。キャリア形成においては、大学での様々な活動へ注力することは、少なからず影響を及ぼすことが考えられる。しかしながら、早期のキャリア支援がその後の行動に繋がっていないことから、対象大学で実施しているキャリア支援プログラムもしくはキャリア支援科目のカリキュラムについて、再検討が求められる。さらにインターンシップへの参加が必ずしも就職活動を有利に進める訳ではないが、インターンシップへの参加率が年々、高まっている状況からも、インターンシップを含めた正課活動以外のプログラムへ参加を促すアプローチについて、キャリア支援以外の観点から行動を生起する諸要因の検証していくことが課題だろう。

表4 注力活動と各因子得点の関係

		注力群	注力不十分群	p
学業	n	86	13	
キャリア自信 (因子)	平均	26.91	24.23	0.04
曖昧性 (因子)	平均	14.72	17.23	0.023
部活動	n	72	27	
キャリア好奇心 (因子)	平均	7.51	8.22	0.041

* p<.05

本稿の結果から、3年次や4年次に実施するキャリア支援を単純に1,2年次にスライド展開することは望ましくない。大学での様々な取り組み状況とキャリア形成に関係性がみられることから、キャリア支援の早期的な展開やプログラムの検証については大学生生活全体から検討していくことが求められる。今後、対象大学において展開されている初年次教育を含め、段階的で縦断的な検証をしていくことが望まれる。

引用参考文献一覧

- ①花田光世, 宮地夕紀子, 森谷一経, 小山健太 (2011) 高等教育におけるキャリア教育の諸問題. KEIO SFCJOURNAL. 第11巻2号, 2011年. P.80
- ②文部科学省 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
- ③田原陽介, 常浦光希, 浦部隼希, 田邊良祐 (2020) 環太平洋大学体育学部体育学科におけるキャリア教育に関する実践. 環太平洋大学紀要. 16号, p.151-157
- ④常浦光希, 田原陽介 (2021) 体育・スポーツ系大学における就職支援プログラムの検討-2020年度体育学科における就職状況から-. 環太平洋大学紀要. 18号, p.301-306
- ⑤下村英雄, 堀洋道 (1994) 大学生の職業選択における情報収集行動の検討. 筑波大学心理学研究. 16号, p.209-220
- ⑥下村英雄 (1998) 大学生の職業選択における決定方略学習の効果. 教育心理学研究. 46号2巻, p.193-202
- ⑦若林満, 後藤宗理, 鹿内啓子 (1983) 職業レディネスと職業選択の構造-保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連-. 名古屋大学教育学部紀要. 30巻, p.63-98
- ⑧古田克利 (2010) インターンシップ経験が新入社員のキャリア適応力に及ぼす影響. インターンシップ研究年報. 13号, p.1-7
- ⑨古田克利 (2014) インターンシップ実習中の自律性充足が大学生のキャリア自己効力感に及ぼす影響. インターンシップ研究年報. 17号, p.1-10